

はじめに

本研究報告は、1999年12月に東京大学において博士（工学）として認められた学位論文「兵庫県南部地震の実被害データに基づく建物被害評価に関する研究」の全文と、国際会議等で英語で発表された関連論文を掲載したものである。

1995年1月17日午前5時46分、成人の日を含む3連休が明け、いつもと変わらぬ平日の朝を迎えようとしていた矢先に、兵庫県南部地震が都市を襲った。私が現地を訪れたのは、それから約1ヶ月ほどしてからのものであった。被災地は地震直後よりはやや落ちつきを取り戻しているものの、見慣れた神戸の風景からはほど遠く、道路は渋滞し、街は瓦礫の撤去に追われていた。現地入りして間もなく、私は、一人の少年が倒壊した木造家屋の瓦礫の前で線香を上げているのを見た。恐らく倒壊により家族を失ったのだろう。初めて目の当たりにした地震による悲惨な現状を嘔み締めながら、「自分に何が出来るだろうか」と自問しながらも、答を見つけられずに、数日の間歩き続けたことを今でも生々しく覚えている。

あれからちょうど5年の月日が流れた。防災都市計画研究所と早稲田大学理工総研の災害情報センターでの1年半、東京大学生産技術研究所に来てからの3年半、私にとってのこの5年間は、多くの方々に大変貴重な体験をさせていただいた期間であった。本報告書は、長かったようでもあり、一瞬のこのようでもあったこの5年間の、私のひとつの「かたち」である。多くの方々に支えられたこの5年間の貴重な体験により、当時見つけられなかった「自分に何が出来るだろうか」という問いに対する自分なりの答あるいは方向性が見えてきた気がする。

昨年も、台湾、トルコなどで地震が発生し、多くの方々が亡くなられた。研究をするにあたり、多くのデータを取り扱うことがあるが、当然のことながら、それらは単なる記号ではなく、その数字の裏には人間ひとりひとりの人生あるいは社会背景など忘れてはいけない大切な意味がある。博士の学位を授けられた今、数字の意味を十分に認識し、被災地を初めて歩いた時の初心を忘れることなく、責任ある一研究者としてこれからも研究を続けていきたいと思う。

多くの方々の御支援・御指導のもと、学位論文をこのようなかたちでまとめることが出来た。特に東京大学の山崎文雄先生、藤野陽三先生、小出治先生、中埜良昭先生、目黒公郎先生、そして横浜国立大学の村上處直先生らには、主査・副査として多大なる助言をいただいた。また被災地域である尼崎市、伊丹市、宝塚市、西宮市、芦屋市、神戸市、明石市、北淡町役所の方々には、建物被害データを提供していただくと同時に、建物被害調査の研究に関して協力をしていただいた。心より感謝したい。

博士論文を書き終えた今、兵庫県南部地震により亡くなられた多くの方々のご冥福を祈るとともに、被災地の更なる復興を願う次第である。

2000年1月
村尾 修